

原著論文

莫逆の友 河島皇子

山野 清二郎

(教育学科・教授)

和文要旨

河島皇子は天津皇子と莫逆の契りを交わしながら、天津皇子の謀反を密告した人物として『懷風藻』伝記は扱っている。一般に『懷風藻』の伝記は詩作品と関連性を有しているのに、『懷風藻』中に遺る彼の詩「山斎」は、この事件とは関係を持たない春の宴の詩と見られて来た。しかるに、語句の検証により、その詩は事件一、二ヶ月前の作と考えられ、伝の記述とつながってくる事が分かる。天津皇子との親交によって、河島皇子はむしろ朝廷側から疑惑を招いた可能性があり、彼は莫逆の契りを守り、天津皇子を弁護することによって、かえって密告者の烙印を押される結果となったのであらうと思われる。

キーワード

天津皇子 年光 「山斎」詩

はじめに

河島皇子と言えば、天智天皇の第二皇子で、天武天皇十年三月に、『日本書紀』の編纂に繋がる作業と思われる帝紀及び上古の諸事を記し定める役を詔された十二名の筆頭者だった^①ということよりも、『懷風藻』の河島皇子伝記に載る天津皇子逆謀事件に係わる行動の方が多くの人に知られているであらう。彼は天津皇子と莫逆の契りを交わしていな

がらも、天津の謀反を密告してしまったという話である。この事件については、すでに数々の論究がなされ、詰まるところ、これはしくまれた毘で、天津皇子は冤罪であったのだからというのが、大方の見方となっているようである。それに力を貸した形の河島皇子は至って分が悪く、彼に同情する見方は今日においても少ないように見受けられる。

河島皇子の行動が、果たして『懷風藻』の伝記に述べるが如きものであったのかどうかは、他に徴する資料がない以上、とりたてて弁護する機会とてないということなのかもしれない。しかし、当時の政治情勢からして、天津皇子がもともと消される運命にあり、持統朝廷方は、それをどのような方法で実行するかについて、周到な策をめぐらしたとみえて、その経緯は『万葉集』の天津皇子の歌や『懷風藻』の彼の伝記を繋ぎあわせてみただけでも、およそ単純なものではなかったことが読みとれる。となると、河島皇子がこの事件に係わりを持たされたそのあり方も、単に伝記の内容を鵜呑みにするのではなく、もう少し多面的に考察する必要があるように感ずる。ここでは、その辺の事情を『懷風藻』における河島皇子の詩を基にして考えてみたいと思うものである。

一

『懷風藻』には、詩の前に作者の伝記を載せている詩人が九人いる。伝記の有無がいかなる基準によっているのかは定かでないが、その特徴

としては、僧侶に多いこと（四人）、一部の例外を除いて、古い時代の皇族詩人にかたまっていること（四人）などが言えるであろう。前者の僧侶の伝記は、『続日本紀』などにも繁く表れていて、言わば馴染みのものであるが、後者については、古い時代の詩人の遺風を偲ぶには、それ相応の伝記を必要とするというような編纂者の意図が働いていたのかもしれない。それはまた『懷風藻』の詩が大々的に詩苑を中心として展開する以前の、かつて私が「日まだ浅き近江朝漢文学及びその流れをひく時期」^②と位置づけた時代とも重なっている。

ところでその伝記であるが、たとえば大友皇子のそれを読んでみると、彼が父親である天智天皇の後をどのようにして嗣いだのか、壬申の乱にはどう戦ったのか、どういう命の終え方をしたのか等のことには一切触れず、ただ「会壬申之乱。天命不遂。時年二十五」と記すだけで、伝の大半は皇子の風貌や不安な夢見、藤原鎌足の援護、そして太政大臣や皇太子に昇って、その有能ぶりが人々に賞賛されたという記事に尽きていると言ってよい。この伝の後に続く彼の詩は、「侍宴」「述懷」の二首で、いずれも伝で述べる地位定まった皇太子時代の作品そのものと言える。このことは、伝に合わせて詩を選んだというよりも、皇子の遺された詩を基にして、それに副う形で伝の内容を整え叙したことを示すものとも考えられよう。

また、大津皇子の伝記と詩との関係について見るならば、彼の人間としての器量や人士との関わりを述べている伝の前半部分と、詩「春苑言宴」や「遊獵」の作品とは人間関係の立場から一脈通い合うものがあること、そして、伝の後半部分の謀逆に及ぶ叙述と、一絶「臨終」の詩（一部には後人の作ではないかとの見方もあるが）が結び合うものであることは明白であろう。

以下、釈智蔵や葛野王の伝記にしても、伝と詩は一見すると掛け離れているかの如く映るが、伝の語っているところが、詩の理解に役立つものであることは、容易に見てとれる。釈智蔵の若き頃の奇行伝と晩年の作と思

われる詩は味わい深いし、葛野王の詩は伝の前半で述べる勤勉さの成果と見なすことができる。これらは当然と言えば当然のことであろう。

ところが、河島皇子の伝記は、詩との間に何の関係も見出せないばかりか、むしろ矛盾するかのようなものに映ずる。左に原文を示そう。

河島皇子。一首。

皇子者。淡海帝之第二子也。志懷溫裕。局量弘雅。始与大津皇子。為莫逆之契。及津謀逆。島則告變。朝廷嘉其忠正。朋友薄其才情。議者未詳厚薄。然余以為。忘私好而奉公者。忠臣之雅事。背君親而厚交者。悖德之流耳。但未尽爭友之益。而陷其塗炭者。余亦疑之位終于淨大參。時年三十五。

五言。山齋。一絶。

塵外年光滿。林間物候明。
風月澄遊席。松桂期交情。

伝はひたすら大津皇子の謀逆に関係した話になっていて、河島皇子の行動が是であつたか非であつたかが論じられるだけで終わる。その次に掲げられた詩一首は「山齋」という作品で、河島皇子が山荘で誰とも特定できない人物と宴を催して友情を誓いあつたというふうに解されている。このように、伝と詩との間には内容的に大きな隔たりがあり、そのことから、この詩は大津皇子の事件とは何の関係もない、彼が親しい友と会した宴での作を採つたのだらうというような見方がされてもいる（後述）。だが、本当にそれでよいのであろうか。もしそうであるならば、河島皇子の伝は、もう少し彼の日頃の交友関係の言動などを主にした内容のものであつて然るべきではあるまいか。それがこのように大津皇子の事件を巡る記事で終始しているということは、この河島皇子の伝と詩との間の関係は、改めて見直される必要があるのではないだろうか。

ことに河島皇子が『日本書紀』の編纂に一部なりとも関与したといわ

れるほどの文才を有していたのであれば、彼の詩作品が『懷風藻』に載っているもの以外にも存在したことは想像に難くない。それらがすべて散佚してしまっていて入手困難であったというのならばともかく、そうでないならば、先の詩も、伝の内容と無関係ではなく、前述の詩人たち同様、伝と関係のある詩を編者は意識して選り採ったと考えた方が自然なのではあるまいか。むしろこのことが、大津皇子の事件に関する河島皇子の別の真相を語るべく作用しているとみることもできるのではないか。では、この詩と事件とはどのような関わりを持つのだろうか。その点を次に考えてみよう。

二

河島皇子の詩を再掲する。

五言。山斎。一絶。

3、塵外年光満。林間物候明。

風月澄遊席。松桂期交情。

この詩の制作年時は定かでない。『懷風藻』中で、同題もしくは近似の題を持つ詩名とその作者名とを挙げるならば、

13、「山斎」……………中臣朝臣大島

39、「山斎言志」……………大神朝臣安麻呂

51、「秋夜宴山池」……………境部王

となる。「山斎」は、この時代、庭園内の小亭や造り庭全体を意味したとの見方もあり^③、「山池」などはその例になるのかもしれないが、『懷風藻』中の「山斎」については、芳賀紀雄氏による詳細な検討^④の通り、山にある山荘・山亭らしきものを指すと見てよいだろう。同題の詩は同

じ場の作である可能性もあるが、河島皇子が在世中の作という裏づけがとれない以上、その関連性について軽々に云々することはひかえよう。

問題となるのは、河島皇子の詩の作られた季節であろう。先に挙げた13、39、51の三首は、いずれも秋の作である。しかし、河島皇子の「山斎」詩のみは、林古溪『懷風藻新註』（昭和三十三年）や小島憲之『日本古典文学大系69懷風藻文華秀麗集本朝文粹』（昭和三十九年）以来、一貫して春の詩として解してきた。それは初句目の「年光」を「春光」の意に捉え、二句目の「物候」も小島注は、

唐杜審言、和晋陵陸丞早春遊望「偏驚物候新」

を用例として示して、その傍証としているかの如くである。

しかし、河島皇子の詩の三・四句目にある「風月」「松桂」という語が、春の語としてふさわしいかどうかについては何も言及していない。およそ一篇の詩を完成作として見た場合、季節の移り変わりをテーマにした内容のものでない限り、前後で季節に矛盾をきたすような解になることは許されない。もしそうなってしまったならば、その解釈は改めて見直されねばならないだろう。

そこで、まずは三・四句目の「風月」「松桂」の語から考えてみよう。ここでは例を限定して、『懷風藻』中の語句をもって示すことにするので、右の語ないし字がいかなる季節語と同居しているのかを確認してほしい。

62、初秋於長王宅宴新羅客。一面金蘭席。三秋風月時。

（調忌寸古麻呂）

65序、秋日於長王宅宴新羅客。山水助仁。風月無息肩之地。

（下毛野朝臣虫麻呂）

68、於宝宅宴新羅客。無疲風月筵。桂山餘景下。菊浦落霞鮮。

（長屋王）

77、秋日於長王宅宴新羅客。秋天風月時。置酒開桂賞。

（百濟公和麻呂）

80、從駕吉野宮。葉黃初送夏。桂白早迎秋。

(吉田連宜)

115、飄寓南荒、贈在京故友。

風前蘭送馥。月後桂舒陰。斜鴈凌

雲響。輕蟬抱樹吟。

(石上朝臣乙麻呂)

右の例からも、「風月」や「桂」は秋の季節語として使用されていることが分かるだろう。また、語を入れ換えて「松風」「桂月」「月桂」として探ってみた場合でも、同様のことが言える。

53、七夕。金漢星榆冷。銀河月桂秋。(山田史三方)

56、七夕。菊風披夕霧。桂月照蘭州。(出雲介吉智首)

97、仲秋積糞。玉祖風蘋薦。金疊月桂浮。(藤原朝臣万里)

118、秋夜閨情。空思向桂影。独坐聽松風。(石上朝臣乙麻呂)

なお、「桂月」「月桂」は月の異名として用いられ、53、56では七夕の月を表わしているが、諸橋轍次『大漢和辞典』には、「陰曆八月の異名」という義解も載せられている。よって、河島皇子の詩は、後半の三・四句が明らかに秋の場面描写になっていることが看取されるであろう。

この三・四句についてさらに読み解くならば、「風月澄遊席」という句に対して「松桂期交情」と続くのは、両句ともただの情景描写ではなく、風と月とが遊席に澄んで現れるその場において、松と桂とが互いの交情を契るという受けとめ方の外に、「松風」や「桂月」の熟語が他に存することから考えても、交情を期するのは松と桂との間だけでなく、「風」に対して「松」が、「月」に対して「桂」が、照応する形でそれぞれ情を交わしているというふうにも読みとれよう。それらが實際何を意味させているかは玄妙であるが、その契りがいかに堅いものであるか、これすなわち、人と人との結びつきの堅さを暗示した表現であることは

容易に理解できよう。その情は引き締まる秋の気色の中のことと解してこそ、一層の重みが増すであろう。

そうなると、前半の初・二句はどうなるのであろうか。二句目の「物候」について、小島注は先に触れた如く、春の詩に出てくる語例を挙げて春の風物を意味させようとしているが、この語は普通「万物が氣候に應じて至ること」「氣候風物」を意味する語であって、ある特定の季節のみに使用する語ではない。ちなみに、簡野道明『字源』や『大漢和辞典』は等しく

「楊炯、登祕書省閣詩序」平看日月、唐都之物候可知。

の用例を挙げている。このように、春にでも秋にでも適う語であることは言を俟つまい。

さて、問題は初句目の「年光」ということになる。前述の如く、近年は「年光」＝「春光」説が勢いを得ており、平成十二年刊の江口孝夫『懷風藻』^⑤では、語釈のところで「年光」を「春の光。年月、光陰の意ではない」と断言しており、同十四年刊の日中比較文学研究会「懷風藻研究注釈編(一)」^⑥においても、「年光」は「新春の輝き」と釈して、用例を挙げながら詳述している。

しかし、「年光」を「年華」と同義として扱っている中国発行の辞典に依れば、

年華……猶言光陰。古華字光字。常通用。如日光亦称日華。韶光

亦称韶華。故謂年歲曰年華。「徐陵賦」年華未暮。容貌

先秋。(『辞源』上冊、商務印書館發行、中華民國四十年十月初版)

年華……時光、年歲。(用例略)(『辞海』辞海編輯委員會編、上海辞書出版社發行所、一九八九年版)

のように、「春光」の意を掲げていないものもある。本当に「年光」は「春の光」なのであろうか。たとえば、小島注がこの箇所用例として掲げている

初唐駱賓王、賦得春雲処々生「千里年光靜、四望春雲生」

の詩句について考えてみるに、この「年光」は遠大なる広がりの中で季節に拘泥されない時の光を意味させているのではあるまいか。千里のかなたにまで一面に時の光が静かにふりそそぐ、その中に身を置いて四方を望めば、春の雲が生まれ出て来ているという詩境になつていと解すべきであろう。もし二句続けて春光・春雲などという意になる語句の使用をしているとしたら、中国の詩においてはあまりにも拙く、普通には避けるべき語句と言えるのではあるまいか。したがって、そういう訳は誤解なのである。

だが、この「年光」＝「春光」説は、『懷風藻』中にもう一例、次の詩があることによつても多くの賛同を得ている。長屋王の詩である。

五言。元日宴。応詔。一首。

67、年光泛仙籟。 日色照上春。

玄圃梅已故。 紫庭桃欲新。

柳糸入歌曲。 蘭香染舞巾。

於焉三元節。 共悦望雲仁。

詩の本文は、小島憲之校注『日本古典文学大系69懷風藻文華秀麗集本朝文粹』に従ったが、じつは、二句目の「日色」については、このように記している写本・版本の類は存在しない。すべて「月色照上春」となつていて異同はない。それを前述の『懷風藻新註』で林古溪は「月色とはあるが、日色としたい」と注した。「年光」＝「春光」の願望から出された見解と言えよう。それが小島憲之校注『日本古典文学大系69懷風藻文華秀麗集本朝文粹』の本文では右のように意改された。以後、この本文が「年光」＝「春光」説と同居した形で、今日でも支持されているのである。驚くべきことと言わねばなるまい。

「年光」を「春光」の意として、「月色」も「日色」としてしまった

ならば、初句目と二句目とは、ほとんど同内容を述べた詩句になり、冗句そのものと化してしまう。だがそうではあるまい。「元旦宴」の題が示すように、この詩はめでたい場での応詔詩である。工夫が凝らされ、初句二句、三句四句、五句六句が対を帯びながら、詩境が展開されている。「年光」と「月色」、「玄圃」「梅」「故」と「紫庭」「桃」「新」、「柳糸」「歌曲」と「蘭香」「舞巾」が、それぞれ巧妙に配置されていること、一目瞭然であろう。そこでは意味の重複はない。「年光」は「春光」などでなく、「月色」との対から考えて、「年」の意を重んずべきなのである。まず歳月が改まり、新たな年の光が泛かぶ。そのもとの宴の中、夕暮れを迎える頃に、月が春めいた気の空に照る。このような構成で初句二句は成っていると解すべきなのである。したがって、ここでも「年光」には本来的に「春」の意は含まれていないと証することができ。さればこそ、前述の『辞源』の「年華」の徐陵賦のような年たけた際の用例も存するのである。

このように見てくると、河島皇子の「塵外年光満」も、当然「春の光」などには限定されない、あくまでその年その時の光なのであり、詩全体からみるならば、むしろ年が実りの秋を迎え、物みな満つる光の中の山斎の有様を一如に詠じていると捉えるべきであろう。皇子の詩は、他の「山斎」詩同様、秋の季節の中で制作された。しかもその秋は、月愛づる八月の頃であつたらう。そうなつて来るとどうなるだろうか。

三

大津皇子が謀反のかどで逮捕されたのは、『日本書紀』に依ると、朱鳥元年（六八六）十月二日のことであつた。それに先だつ九月二十四日にも大津皇子は皇太子に謀反を働いたという。そして、逮捕翌日の十月三日に死を賜る。『懷風藻』の大津皇子の伝記では、その原因を新羅僧行心のそそのかしに求めている。河島皇子とこの事件との係わりは、一

に挙げた皇子の伝記の記述に尽きるが、彼の「山齋」詩を春のものと見る小島憲之前掲書は

伝記によれば、皇子は天津皇子の謀反の計画を訴えたわけになり、この詩の「期交情」と関係づけて考えない方がよい。

と注している。また、江口孝夫『懷風藻』は、この詩を事件後のある春の日の作と考えているらしく、解説のところで

持統への密告は天津への裏切り行為になり、天津が理想化され悲劇の英雄に祭りあげられると、川島はいっそう分が悪くなってしまう。天智から天武へ。世の中がこのように変転していく中で、川島は風波立てずに生きることだった。それには詩園での生活は格好のものだった。文人的気分にあふれる作品である。

と述べている(同書五二頁)。いずれも伝記と詩との関係性を外におき、個々別々のものと扱っている点で共通するものがある。だが、一のところでも触れた如く、伝と詩とは絡み合うものでなければならぬまい。そうでなければ懷風にならぬ。では、どのように考えればよいのだろうか。伝と詩とが接合するとすれば、河島皇子の「山齋」詩は、天津皇子の変が起きた直前、一、二ヶ月前の作と考えてこそ、意味が生じて来よう。井実充氏は「天津皇子の詩」なる論考で^③、天津皇子は私的な酒宴で風雅な作詩の啓蒙を行い、「他の参加者たちの作詩の手本となった。彼らは、皇子に続けとばかりに、修辭を凝らした美しい詩を競って詠みあった」と論じ、大友皇子以来の詩人の流れを追っているが、なぜか河島皇子については一切口をつぐんでいる。しかし、情況的には当然、河島皇子も天津皇子の宴の要員とみてよいだろう。あるいは河島皇子の方で催した宴に天津皇子が加わったこともあったかもしれない。そんなころ

おいの山莊での宴で、河島皇子は、天津皇子と莫逆の契りを確かめ合うような交情を期した。それがこの「山齋」詩であろう。

これほどの堅い絆で結ばれた仲なのに、河島皇子が天津皇子の変を告げたということは、その時間的距離が短ければ短いほど(すなわち宴の一、二ヶ月後)、その豹変ぶりが露わとなり、不自然さが増し、河島皇子のとった態度の理由が分からず、それは一気に彼の裏切り行為とみなされる。なぜこのように急転したのか。これをひとえに河島皇子の変節と片づけて、能事足れりとするのでは、あまりにも見方が一方的にすぎまいか。すべての情況を把握して考察するには困難が多いが、およそ実相と伝聞伝説に基づく記述との間には乖離がある。普通に考えて、天津皇子に親しくしている友がいたとすれば、その友、すなわち河島皇子に疑惑の目が及んだであろう。

天津皇子の謀逆がどれほど計画的なものであったかは疑わしい。『万葉集』では、石川郎女との間の恋愛が津守連通の占いによって暴露された^④とか、『懷風藻』天津皇子伝記では、前述の如く新羅僧行心の占いによって謀反を勧められたとか、『日本書紀』では二度も謀反を行ったとか、当伝記では河島皇子こそがその変の確証者であったと書かれている。要するに、天津皇子の身辺には探索や監視の網目が張り巡らされ、ことによると、挑発・誹謗・中傷などがうごめいていたことは、十分想定でき、とても彼に謀反を準備するだけの時間的余裕が与えられていたようにには思われない。もし天津皇子が敵の目には全く分らないように巧妙に事をめぐらしていたとするならば、持統朝廷側は、親密なる友、要注人物の河島皇子の動静を観察することで、天津皇子の企みを推測するという手段をとることにしたのであろう。

身の危険に感づき、追いつめられた河島皇子が本当に変を告げたと仮定してみても、伝記には「及津謀逆。島則告変」と書かれているのであって、これを小島注のように「天津皇子が謀反を計画するに及んで、河島皇子はすぐにその異変を密告した」(傍点筆者)と訳すのは誤解である。「則」は

「即」ではない。すぐに告げたわけではないのである。河島皇子は、事の成り行きから難が己れに及んで来るのを身を感じながらも、莫逆の友としての操を守り続けたのではなかったか。その時間の小さな流れが、「しかるのち」を意味するこの「則」に示されているようにも思われる。

臆測はいかにあれ、河島皇子に何の査問もなかったとは考えられない。一味としての嫌疑が及び、河島皇子に情況の釈明が求められた際、莫逆の友たる彼は、大津皇子の心情を誤解のないようにいつわることなく説いたのではなかったろうか。場合によっては、草壁皇子との摩擦や衝突が何に起因するのも語ったかもしれない。それは友としての責務であつたろう。自分がそれに加勢しているわけではないことも述べたかもしれない。

だが、この食い違いをキャッチした持統朝廷側は、それこそ謀反だと決めつけたのであろう。体制側の論理とは、得てしてこのようなものではないだろうか。このことが、河島皇子が変を告げたという事実との実相なのではあるまいか。すなわち、河島皇子の言わば大津皇子に対する弁護が、体制側には変を告げてくれたことになったという次第だったのではないかと推測する。

河島皇子は裏切ったのではない。かばったことが逆に利用されてしまったのであろう。伝の作者は、事件を聞き及んだ末に、しきりに儒教の見地から立論し、朋友や議する者は感情相容れないものがあつたと言ふ。伝の記述は明らかに菌切れが悪い。河島皇子の正邪は言わば保留のような形になっているかに映る。伝え聞く話の評価があいまいにならざるを得ないことは、昔も今も変わらないであらう。

この事件で、生きながら死ぬほどの深い傷を負ったのは、河島皇子であつた。密告と見なされたこの行為によって、彼が何か特別な昇進に浴したわけではないことも、彼の「告変」が積極的なものでなかったことを物語っている。それどころか、それから三年後の秋、持統天皇の行幸につき従った時のものとして、『万葉集』巻一に載る彼の作ではないかとされている。

幸于紀伊国時、川島皇子御作歌 或云、山上臣懷良作

34、白波の浜松が枝の手向草幾代までにか年の経ぬらむ 三、年は経にけむ

の歌は、のしかかる責苦の溜息の中から紡ぎ出された歌のようにさえ感じられる。白波寄せる浜辺の松の枝に掛けられた手向草に向かつて、かの松桂の交情を思い起こし、己れの心の中で色褪せなかったはずの莫逆の契りの悲劇を噛みしめながら、どこか虚無的に呼びかける。人はこの歌を、有間皇子の磐代の松の歌と関係あるかと見、また山上憶良の代作かとも見る。しかし、『万葉集』歌の問題に分け入り、その歌の当否を論ずることは別の機会に譲ることにしよう。それほどまでに不確かさに包まれつつ、河島皇子は忘れ去られる人物として、三十五年の短い生涯を終える。『懷風藻』の伝における、世に流れた風聞による記述は、河島皇子の操高き詩との間に、如上のような考察の余地を与えることなく、かえって隔絶を生み、人をして皇子を曲解せしむるに至った。「莫逆之契」の語の重さと、「山斎」の詩こそ、彼の真摯に生きた証の贈物であることに、今こそ気づくべきであらう。

注

- (1) 『日本書紀』卷第二十九、天武天皇十年三月丙戌、天皇御于大極殿、以詔川嶋皇子・忍壁皇子・広瀬王・竹田王・桑田王・三野王・大錦下上毛野君三千・小錦中忌部連首・小錦下阿曇連稻敷・難波連大形・大山上中臣連大嶋・大山下平群臣子首、令記定帝紀及上古諸事。大嶋・小首、親執筆以録焉。
- (2) 拙稿『懷風藻』の詩風の変遷―藤原氏の詩から見て―(『漢文学会々報』第三十四号、昭和五十年六月)。
- (3) 林古溪『懷風藻新註』(明治書院刊、昭和三十三年十一月)。
- (4) 芳賀紀雄「詩と歌の接点―大伴旅人の表記・表現をめぐって―」(『上代文学』第六十六号、平成三年四月)。

- (5) 江口孝夫『懷風藻』（講談社学術文庫、平成十二年十月）五一頁。
- (6) 懷風藻研究編集委員会『懷風藻研究』第九号（日中比較文学研究会刊、平成十四年五月）一九頁。
- (7) 大野保『懷風藻の研究』校異篇（三省堂刊、昭和三十二年二月）五〇頁。
- (8) 河島皇子の「山齋」詩を秋の季のものとして通釈しているものに杉本行夫『懷風藻』（弘文堂書房、昭和十八年三月）がある。研究はもう一度戦前の業績を吟味すべきであろう。
- (9) 井実充史「大津皇子の詩―その文学史的位置―」（『和漢比較文学』第十二号、平成六年七月）。
- (10) 『万葉集』卷二相聞一〇九番歌の題詞。

（二〇〇七年十月二十五日受稿）

Prince Kawashima having the Firm Friendship

Yamano, Seijiro

Abstract

Though Prince Kawashima had the firm friendship with Prince Otsu, he is said to have informed the Imperial Court that Prince Otsu was rebelling against the ruler. In “Kaifuso” the poem by Prince Kawashima shows that he did not really mean it and he was deceived into suggesting his friend’s rebellion by the Imperial Court.

Keywords : Prince Otsu, the light of time, the poem of “Sansai”